

# 秘書・ビジネス実務教育を通じた 社会人基礎力の育成

Nurturing Essential Competencies through  
the Secretary and Business Skills Education

井崎 美鶴子  
(Mitsuko IZAKI)

**キーワード**：社会人基礎力、秘書、ビジネス実務教育、キャリア教育

**Key Words**：Essential Competencies, Secretary, Business Skills Education,  
Career Education

## I. はじめに

秘書・ビジネス実務教育の一環として、本学では秘書技能検定試験の受験を奨励している。1年次に「秘書実務」「秘書学概論」の授業を履修した後、秘書技能検定試験を受験することを奨励しており、検定試験の受験を経て、2年次には「秘書演習Ⅰ」「秘書演習Ⅱ」の授業を通じて学びを深め、より実践的なビジネススキルを習得する。先行研究において秘書技能検定試験は、専門的秘書の養成のみならず、社会人として求められる基礎的な知識・技能の習得や、就職指導への活用が報告されている。

本稿では、秘書技能検定試験と社会人基礎力の関連について、どのような能力が向上したのか、検定試験後の秘書・ビジネス実務教育にどのような影響があったのかを短期大学生を対象に行った調査結果をふまえ、考察する。

## II. 秘書・ビジネス実務教育と秘書技能検定試験の変遷

1960年代に、企業で経営者が効率的に仕事をするために秘書の機能が注目され、秘書教育に目が向けられるようになった。江藤（2022）は、秘書教育プログラムの成立と衰退が、短期大学の量的拡大と縮小の時期に連動している特徴を指摘している。短期大学が恒久化した1964年は、日本経済の高度経済成長期にあたる。秘書教育プログラムに携わる短大関係者の働きにより、1980年に当時の文部省から秘書科の設置認可を受けることとなり、この政府による学科設置認可によって、秘書教育プログラムは権威付与を得た。ここから秘書教育プログラムの履修者が急激に増加し、1994年にピークを迎えた後、右肩下りの衰退を続ける中でポスト秘書教育プログラムを探索する時期にあると江藤（2022）は述べている。

短期大学において秘書教育プログラムを普及するための牽引役となった現在の「全国大学実務教育協会」は、1973年に「短期大学秘書教育懇談会」として設立された。以降、同年11月に「短期大学秘書教育協議会」に名称を変更し、1974年に「全国短期大学秘書教育協会」となり、1994年に「全国大学・短期大学実務教育協会」に改組され、2003年に「全国大学実務教育協会」へと名称変更した。「日本秘書学会」も研究領域の拡大と研究の活性化を図るために、1996年に「日本ビジネス実務学会」へと名称変更した。このように、ポスト秘書教育プログラムはビジネス実務やキャリア教育まで領域が拡大されてきた。そうした経緯を踏まえ、本稿では秘書・ビジネス実務教育として扱う。

秘書に関する資格としては、1972年に実務技能検定協会が設立され、1973年の初回以来、これまで130回に上る秘書技能検定試験が実施されてきた。「全国大学実務教育協会」が資格認定する上級秘書士、秘書士などの資格もあるが、本稿では、調査対象者に多い秘書技能検定試験の受験と社会人基礎力の関連、秘書・ビジネス実務教育への影響を考察したい。

実務技能検定協会の前理事長である元吉は、初期の頃の秘書技能検定試験1級受験者は日本を代表する大企業、有名企業の秘書たちであったことを述べている。又、小松（2021）は、1979年出版の秘書技能検定試験副読本とされた『女性秘書入門』から、当時の秘書は大企業等に勤務する良家の子女である女性秘書をイメージしたものであり、秘書技能検定試験1級の審査基準には「格調があること」という言葉が存在したほどであると述べている。高度経済成長を遂げた日本社会では高等教育の大衆化がもたらされ、女性の社会進出とともに秘書技能検定試験の受験者の裾野が拡大していったことや、秘書技能検定試験を定着・普及させていくためには合格率を高める必要があり、「人柄教育」を前面に押し出すようになったことを指摘している。社会の変化に合わせて試験問題も変化してきたが、「企業における一般的な事務職ならびに秘書業務に関する基本的な実務知識」を問うていることは変わっていない。

### Ⅲ. 先行研究

江藤（2022）は、職業の専門分野を「専門職型」（医師、看護師、保育士など）と、事務系職種など汎用性の高いゼネラリスト型の「非専門職型」に大別した上で、秘書教育プログラムは、短期大学における「非専門職型」職業教育の代表例であることを述べている。秘書教育プログラムは、短期大学における職業教育プログラムのひとつとして、具体的な職業名を冠しながらも秘書の専門職としては定着せず、実際には一般事務、特に女性事務の育成を行っていた。補助的な事務職であるゼネラリスト育成は、どの組織にも適応できる人材育成でもあり、これは今日の社会人基礎力などに代表される基礎的・汎用的な能力を持った人材育成、「転用可能な能力」育成を行っていたと考えられると述べている。秘書技能検定試験は「級」という明確な目標を設定し、段階的な到達目標を設定したプログラム学習としての機能を有しており、習得した技能レベルを外評価として可視化できるというメリットにも言及している。

油谷（2017）は、秘書技能検定試験は職業人としての基礎的な知識・技能を習得する上で

最も適切な検定であると述べている。荻野ら（2021）は、秘書関連資格・検定は社会人としての汎用的な一般知識・技能を養成するためのものと認知されていることを示している。そして高松ら（2022）は、大学等の教育において秘書関連資格・検定受験の指導がなされる背景として、専門的秘書の養成教育だけでなく、就職活動や社会人として求められる基礎力育成の一手法として活用されていることを述べている。兒島ら（2023）は、秘書技能検定試験が「社会人基礎力を養成できる」「知識のみならず問題解決力や思考力・判断力などを養成できる」ことを検証している。

#### IV. 社会人基礎力と測定尺度

社会人基礎力は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として経済産業省が2006年に提唱し、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されている。これらの能力に加え、「人生100年時代」ならではの切り口・視点が必要となってきたことから、これまで以上に長くなる個人の企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力として、2017年には「人生100年時代の社会人基礎力」が新たに定義された。経済産業省によると、「人生100年時代の社会人基礎力」は、社会人基礎力の3つの能力（12の能力要素）を内容としつつ、能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら、①目的（どう活躍するか）、②学び（何を学ぶか）、③統合（どのように学ぶか）のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要としている。ライフステージの各段階で①～③の視点を意識することが求められている。

測定尺度は、西道（2011）が「社会人基礎力」と文部科学省が提言する「職業的発達に関わる諸能力」の概念的定義を整理し、独自調査で収集した基礎力も精査して加え、4領域から成る測定尺度を開発している。

#### V. 調査概要と結果

##### 1. 調査概要

先行研究より、秘書・ビジネス実務教育における秘書技能検定試験を通じて、社会人基礎力を向上させることができるのではないかと考えた。本稿では、まず1年次科目「秘書学概論」（2022年度）を履修した本学の学生を対象とし、秘書技能検定試験の受験を通じて、社会人基礎力のどのような能力に変化があったのかを調査した。「秘書学概論」は、秘書技能検定試験に関連した科目の一つであり、秘書技能検定試験を受験することを奨励している。秘書技能検定試験前は2022年9月（「秘書学概論」開講時）、検定試験後は2022年12月（「秘書学概論」履修中）に調査を行った。尺度は、学生を対象とした社会人基礎力の測定に多く活用されている西道（2011）の尺度を用いた。各自の社会人基礎力について「4 とてもある」から「1 全くない」まで4段階評価で質問紙調査への回答を求めた。

次に、1年次科目「秘書学概論」（2022年度）を履修した後、より専門的かつ実践的な演習を行う2年次科目「秘書演習Ⅰ」（2023年度）授業を履修した本学の学生を対象とし、同様に社会人基礎力の変化について調査した。秘書技能検定試験の受験は1年次のみにとどまり、2年次科目「秘書演習Ⅰ」の前線で受験した学生はいなかった。質問紙調査は、2023年4月（「秘書演習Ⅰ」開講時）と2023年7月（「秘書演習Ⅰ」閉講時）に実施した。各調査は、事前に研究目的と意義を説明し、回答は任意であり、回答の有無によって不利益を被らないこと、回答の内容は統計的に処理し、個人は特定されないことなどの説明を十分に行った上で実施し、調査参加への同意は回答をもって確認することとした。

## 2. 調査結果

### (1) 「秘書学概論」（2022年度）授業における調査結果

「秘書学概論」（2022年度）を履修した学生64名のうち、秘書技能検定試験前（開講時）と試験後の両方の回答を得られた61名を分析対象とした。結果を表1に示す。秘書技能検定試験の受験をめざして履修した61名のうち13名が秘書技能検定試験2級を受験した。全体として秘書技能検定試験前（開講時）よりも試験後の方が、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「伝える力」「チームで働く力」すべての能力が向上していることが示唆された。

「前に踏み出す力」では、「指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力」0.31と「目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力」0.31が特に向上している。「考え抜く力」では、「目標を達成するための手順や方法について優先順位を決定する力」0.46が最も向上している。「伝える力」では、複数項目で高い数値が示され、特に「自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力」0.47が向上している。「チームで働く力」では、「話しやすい雰囲気をつくって、相手の意見を引き出す力」0.38が最も向上していると分かった。

一方で、試験後よりも試験前（開講時）の方が、数値が高かった項目も散見された。例えば「考え抜く力」の「未知の分野にまで思考を広げることで、新しい解決方法を導き出す力」-0.16や、「伝える力」の「自分の話に信頼感をもってもらえるように話せる力」-0.16などであるが、これらは秘書技能検定試験の学習を通じて、もとの自己評価よりも学生自身が足りないと認識した能力、より高い能力が求められることに気づいた結果ではないかと考える。

表 1 「秘書技能検定試験」前後の社会人基礎力の伸長差

設問項目	検定前(授業開講時)		検定後		検定後－検定前の 平均値の伸長差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
<b>◆前に踏み出す力</b>					
提案するだけでなく、自ら目の前の対象を動かす力	2.08	0.76	2.31	0.48	0.23
指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力	2.54	0.66	2.85	0.80	0.31
目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力	2.15	0.69	2.46	0.66	0.31
人を巻き込んで提案する力	1.85	0.55	2.15	0.55	0.30
立場や意見の異なる人に働きかけて、動かす力	2.23	0.83	2.23	0.73	0.00
自分の果たすべき役割と責任を自覚し、積極的に取り組む力	3.31	0.75	3.38	0.51	0.07
失敗をおそれず、行動に移す力	2.31	0.75	2.31	0.63	0.00
自分の個性や興味・関心にもとづいて、目の前の課題に取り組む力	2.92	0.64	3.08	0.28	0.16
<b>◆考え抜く力</b>					
課題を解決する複数のプロセスを明確にし、最善のプランを立案する力	2.46	0.66	2.38	0.77	-0.08
あらゆる可能性を再検討することで、解決方法を再発見する力	2.54	0.52	2.54	0.66	0.00
既存の発想にとらわれず、解決方法を工夫して考える力	2.15	0.55	2.23	0.73	0.08
未知の分野にまで思考を広げることで、新しい解決方法を導き出す力	2.08	0.49	1.92	0.86	-0.16
正解不正解が曖昧な問題の解決策を見いだす力	2.00	0.58	2.31	0.63	0.31
目標を達成するための手順や方法について優先順位を決定する力	2.54	0.78	3.00	0.41	0.46
得られた情報を、多面的・多角的に整理する力	2.31	0.75	2.46	0.88	0.15
将来設計にもとづいて、いま取り組むべき学習や活動を理解して準備する力	2.77	0.83	2.85	0.80	0.08
見過ごされがちな問題を発見する力	2.46	0.88	2.38	0.87	-0.08
自分に必要な情報や資料を的確に探し出す力	2.62	0.77	2.69	0.48	0.07
<b>◆伝える力</b>					
自分の言いたいことを、わかりやすく、効果的に伝える力	1.92	0.49	2.23	0.60	0.31
限られた時間の中で、情報や主張を、わかりやすく聞き手に伝える力	1.85	0.55	2.23	0.60	0.38
自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力	2.15	0.80	2.62	0.77	0.47
自分の話に信頼感をもってもらえるように話せる力	2.31	0.85	2.15	0.56	-0.16
仲間うちにしからず伝わりやすい言葉で話したりせず、誰もが理解できるように話す力	2.69	0.95	2.77	0.83	0.08
情報を伝えるために、必要な創意工夫を加える力	2.46	0.66	2.85	0.55	0.39
相手の立場に配慮しながら、自分の主張を伝える力	3.08	0.86	3.15	0.80	0.07
調べたことを伝える際に、効果的な手段やメディアを用いる力	2.77	0.44	3.08	0.64	0.31
相手にとって良くないことでも、自分の意見を誠実に伝える力	2.54	0.78	2.54	0.66	0.00
<b>◆チームで働く力</b>					
お互いの個性や能力を理解し、それが発揮できるような関係を築く力	2.85	0.80	3.00	0.71	0.15
グループの中で、自分がどんな役割を担えばよいかを理解する力	2.92	0.76	3.08	0.64	0.16
状況に応じて、自らの発言や行動を適切に律する力	2.85	0.90	3.08	0.76	0.23
他者と共有する「空気」を読んで、自分の行動を修正できる力	3.38	0.87	3.31	0.95	-0.07
相手の言動を観察し、意見や主張を正確に聞き取る力	3.23	0.83	3.31	0.85	0.08
話しやすい雰囲気をつくって、相手の意見を引き出す力	2.77	0.93	3.15	0.80	0.38
固定観念にとらわれずに、相手の立場や意見を理解する力	2.69	0.63	2.85	0.69	0.16
周りの人たちの仕事から、働く意義や大切さを理解する力	2.69	0.85	3.00	0.58	0.31
周囲の人々や物事との関係を理解するために積極的に働きかける力	2.69	0.63	2.54	0.52	-0.15
学んだことや体験したことを、職業や生活とつなげて考える力	2.92	0.64	3.23	0.60	0.31
既存のやり方やマニュアルにとらわれない考えを受け入れる力	2.46	0.88	2.69	0.63	0.23
自分が分からないことを聞き流さずに、相手に質問して確認する力	2.85	0.69	3.08	0.49	0.23

(2) 「秘書演習 I」(2023年度) 授業における調査結果

2 年次の「秘書演習 I」(2023年度) 授業を履修した学生のうち、開講時と閉講時の両方のアンケート回答を得られた32名を調査対象とした結果が表 2 である。全体として、「秘書演習 I」の開講時よりも閉講時の方が、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「伝える力」「チームで働く力」すべての能力が向上していた。「前に踏み出す力」では、「目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力」0.25が特に向上している。「考え抜く力」では、「見過ごされがちな問題を発見する力」0.38が最も向上している。「伝える力」では、特に「自分の話に信頼感をもってもらえるように話せる力」0.43が向上している。「チームで働く力」では、「既存のやり方やマニュアルにとらわれない考えを受け入れる力」0.35が最も向上していると分かった。

表2 「秘書演習Ⅰ」授業前後の社会人基礎力の伸長差

設問項目	検定前(授業開講時)		検定後		検定後－検定前の 平均値の伸長差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
<b>◆前に踏み出す力</b>					
提案するだけでなく、自ら目の前の対象を動かす力	2.53	0.62	2.69	0.54	0.16
指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力	2.94	0.67	3.03	0.59	0.09
目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力	2.53	0.72	2.78	0.55	0.25
人を巻き込んで提案する力	2.47	0.62	2.53	0.62	0.06
立場や意見の異なる人に働きかけて、動かす力	2.28	0.68	2.50	0.57	0.22
自分の果たすべき役割と責任を自覚し、積極的に取り組む力	3.28	0.68	3.34	0.65	0.06
失敗をおそれず、行動に移す力	2.63	0.75	2.84	0.68	0.21
自分の個性や興味・関心にもとづいて、目の前の課題に取り組む力	3.00	0.72	3.19	0.54	0.19
<b>◆考え抜く力</b>					
課題を解決する複数のプロセスを明確にし、最善のプランを立案する力	2.41	0.80	2.75	0.62	0.34
あらゆる可能性を再検討することで、解決方法を再発見する力	2.63	0.71	2.84	0.63	0.21
既存の発想にとらわれず、解決方法を工夫して考える力	2.38	0.76	2.63	0.61	0.25
未知の分野にまで思考を広げることで、新しい解決方法を導き出す力	2.53	0.76	2.63	0.71	0.10
正解不正解が曖昧な問題の解決策を見いだす力	2.44	0.80	2.59	0.67	0.15
目標を達成するための手順や方法について優先順位を決定する力	2.97	0.78	3.13	0.61	0.16
得られた情報を、多面的・多角的に整理する力	2.66	0.75	2.91	0.69	0.25
将来設計にもとづいて、いま取り組むべき学習や活動を理解して準備する力	2.72	0.89	2.91	0.69	0.19
見過ごされがちな問題を発見する力	2.31	0.69	2.69	0.78	0.38
自分に必要な情報や資料を的確に探し出す力	2.63	0.71	2.97	0.65	0.34
<b>◆伝える力</b>					
自分の言いたいことを、わかりやすく、効果的に伝える力	2.31	0.64	2.72	0.63	0.41
限られた時間の中で、情報や主張を、わかりやすく聞き手に伝える力	2.38	0.66	2.59	0.67	0.21
自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力	2.56	0.76	2.75	0.62	0.19
自分の話に信頼感をもってもらえるように話せる力	2.63	0.66	3.06	0.62	0.43
仲間うちにかかわらず伝わりやすい言葉で話したりせず、誰もが理解できるように話す力	2.66	0.75	2.91	0.69	0.25
情報を伝えるために、必要な創意工夫を加える力	2.56	0.62	2.88	0.61	0.32
相手の立場に配慮しながら、自分の主張を伝える力	3.09	0.78	3.22	0.66	0.13
調べたことを伝える際に、効果的な手段やメディアを用いる力	2.75	0.76	2.97	0.65	0.22
相手にとって良くないことでも、自分の意見を誠実に伝える力	2.50	0.57	2.84	0.63	0.34
<b>◆チームで働く力</b>					
お互いの個性や能力を理解し、それが発揮できるような関係を築く力	3.03	0.65	3.16	0.68	0.13
グループの中で、自分がどんな役割を担えばよいかを理解する力	3.16	0.72	3.28	0.77	0.12
状況に応じて、自らの発言や行動を適切に律する力	3.00	0.67	3.22	0.66	0.22
他者と共有する「空気」を読んで、自分の行動を修正できる力	3.31	0.69	3.31	0.69	0.00
相手の言動を観察し、意見や主張を正確に聞き取る力	3.03	0.74	3.19	0.74	0.16
話しやすい雰囲気をつくって、相手の意見を引き出す力	3.00	0.92	3.13	0.66	0.13
固定観念にとらわれないで、相手の立場や意見を理解する力	2.84	0.81	3.00	0.62	0.16
周りの人たちの仕事から、働く意義や大切さを理解する力	3.13	0.66	3.25	0.62	0.12
周囲の人々や物事との関係を理解するために積極的に働きかける力	2.78	0.66	2.88	0.66	0.10
学んだことや体験したことを、職業や生活とつなげて考える力	3.06	0.56	3.09	0.53	0.03
既存のやり方やマニュアルにとらわれない考えを受け入れる力	2.78	0.75	3.13	0.79	0.35
自分が分からないことを聞き流さず、相手に質問して確認する力	3.09	0.64	3.16	0.63	0.07

## (3) 「秘書学概論」と「秘書演習Ⅰ」前後の社会人基礎力の比較

表3は、「秘書学概論」と「秘書演習Ⅰ」の前後での社会人基礎力の伸長を比較したものであり、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「伝える力」「チームで働く力」の能力要素の平均値で比較をした。表3に示す通り、今回の調査より、秘書技能検定試験前（「秘書学概論」の開講時）よりも試験後の方が社会人基礎力のいずれの項目も伸長しており、2年次に履修する「秘書演習Ⅰ」の開講時の方がより数値が高く、開講時にはさらに社会人基礎力が向上している傾向が分かった。

表3 「秘書学概論」と「秘書演習Ⅰ」前後の社会人基礎力の比較

	秘書技能検定試験		秘書演習Ⅰ	
	検定前	検定後	開講時	終了時
前に踏み出す力	2.42	2.60	2.71	2.86
考え抜く力	2.39	2.48	2.57	2.81
伝える力	2.42	2.62	2.60	2.88
チームで働く力	2.86	3.03	3.02	3.15

## VI. 考察

表3の結果より、社会人基礎力の伸長差は、秘書技能検定試験前より試験後のほうが大きいことから、秘書技能検定試験の受験をめざす目標があることで社会人に求められる意識や考え方、状況に応じた対応の仕方、仕事のすすめ方などに対する理解がより深まり、社会人基礎力の向上を促進しているのではないかと考察した。続く2年次の「秘書演習Ⅰ」では、秘書技能検定試験の学習を通じて理解した知識がベースとなり、知識を実務において実践できるように身に付けていく過程での学びが社会人基礎力をさらに向上させることにつながっているのではないかと考える。秘書・ビジネス実務教育を通じて、社会人として求められる基礎的かつ汎用的な能力を育成できることが本調査からも示唆された。

本研究の限界として、秘書技能検定試験の受験者の割合が低く、秘書技能検定試験の受験者と未受験者との比較検討が行えなかったことが挙げられる。今後の課題として、秘書技能検定試験の受験者が増えるよう、学生のモチベーションを高める必要がある。今後も調査を継続し、秘書技能検定試験の受験者と未受験者の比較検討を行うとともに、秘書技能検定試験に関する学習や、秘書・ビジネス実務教育におけるどのような授業内容が社会人基礎力のどの能力の育成につながるかを検証していきたい。

### 【参考文献】

- 江藤智佐子『実務と教養をつなぐ—秘書教育プログラムの成立と変容—』学文社, 2022年
- 荻野正美・樋口勝一・児島尚子・福井就・仁平征次「秘書関連資格・検定取得が取得者にもたらす効果」『ビジネス実務論集 No.39』日本ビジネス実務学会, 2021年
- 公益財団法人実務技能検定協会『創始者元吉昭一が語る ビジネス系検定創立からのあゆみ』公益財団法人実務技能検定協会, 2015年
- 児島尚子, 樋口勝一, 荻野正美, 若生真理子「キャリア教育・就職支援に秘書技能検定が果たす役割—検定問題と社会人基礎力の比較分析—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要第13巻』大阪樟蔭女子大学, 2023年
- 小松由美「変化する社会における秘書検定—SNS上の批判を受けての再考—」『研究集録 第27号』秘書サービス接遇教育学会, 2021年
- 西道実「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」『プール学院大学研究紀要51号』プール学院大学国際文化学部, 短期大学部, 2011年
- 高松直紀, 児島尚子, 荻野正美, 若生真理子, 福井就, 樋口勝一「秘書技能検定が大学生のキャリアレディネスに及ぼす効果」『第41回全国大会要旨集』日本ビジネス実務学会, 2022年
- 油谷純子「ポストコロナ社会でのビジネス実務能力」『研究集録 第26号』秘書サービス接遇教育学会, 2020年
- 経済産業省「社会人基礎力」  
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2023/11/13閲覧)
- 経済産業省 産業人材政策室「人生100年時代の社会人基礎力について」, 2018年  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/007\\_06\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf) (2023/11/13閲覧)